

変わった習性を持つ「オヨギイソギンチャク」に注意

環境増養殖担当 池脇義弘

Key word; オヨギイソギンチャク, 大量発生, 被害

今回紹介するのは、表題にあるオヨギイソギンチャク *Bolocerooides mcmurrichi* です。大きさは、足盤の直径が5ミリ程度、触手は長いもので30ミリ程度になります（岡田他1965）。

西太平洋からインド洋の暖海に広く分布しますが、基質に足盤でひっつく力が弱く、簡単にはがれて触手を使って泳ぐというイソギンチャクとしては変わった習性があります（岡田他1965, 内田・楚山2001）。

普通イソギンチャクは岩などの固い物にひっついていますが。本種は、アマモの葉などゆらゆら揺れるものにも多数付いているのがよくみられ、そのような姿は、徳島県のあちこちでも確認されています（写真1）。



写真1. アマモにびっしりと付着したオヨギイソギンチャク(平成17年10月20日、徳島県海部郡美波町地先で棚田主任撮影)。葉の先端の茶色の物体がオヨギイソギンチャクの群体。

そのほかに、1から数本のちぎれた触手から、その他の部分を再生して増えることができます（写真2）。

もちろん、刺胞動物のイソギンチャクの仲間ですから、触手には毒針が仕込まれた刺胞があり、その針が人に刺さると、痛みをともなう赤い発疹ができることがあります。

本種は、人にとっては「刺されたらちよっと痛い」程度の存在かもしれませんが、時には、漁業に大きな被害を与えることがあります。

被害の原因は、先に述べた、①簡単にはがれて泳ぐ、②ゆらゆら動くものにもひっつく、③数本のちぎれた触手から再生できる、④毒針のある刺胞を持つという特徴と深く関わっています。このような特徴により、本種は魚などを養殖する生け簀の網に付着し、時には養殖生け簀で爆発的に増えることがあるのです。そのメカニズムは、よくわかっていないところもあるのですが、おおよそ次のように考えられています。



写真 2. 徳島県内の養殖生け簀の網に付着していたオヨギイソギンチャク(平成 26 年 11 月 20 日撮影)。数本の長い触手と多数の短い触手を持つことから、数本のちぎれた触手から再生した個体と推定される。

養殖の世話や網替えなどのため網をたぐり寄せたり、海が荒れて網が大きく揺すられたりすると、オヨギイソギンチャクは網からはがれて漂います。そして、ちぎれた触手から多数のイソギンチャクが再生して、おびただしい数の個体が再び網に付着するという結果になるというのです(松岡・伊藤 2002)。

そして、大量の本種が付着した生け簀で網替えなどしようとする時、どのようなことが起こるのでしょうか。網替えによる網の動きで、本種は一斉にはがれて生け簀の中を漂います。そこからちぎれた触手から出た刺胞が養殖魚のエラなどに刺さります。刺胞が多数刺さった魚は、悶絶し、時には死ぬこともあるそうです。

過去には、愛媛県の小割養殖場で大きな被害が出たことがあり(松岡・伊藤 2002)、本県でも、今年に本種が原因と思われる養殖魚の死亡例が報告されました。

これまで、本種の被害があった養殖漁場では、本種は夏季など高水温期に大量発生することが多く、冬季には姿が見られなくなるそうです。したがって、水温が高いときに網替えなどする場合は、本種が大量に付いていないか十分気をつけた方がいいでしょう。

ところで、このようなオヨギイソギンチャクの被害を防ぐ方法はないのでしょうか。愛媛県の報告では、魚を養殖している生け簀に、ウマズラハギや小型のインダイなどを混養するという簡単な方法で本種の被害を防ぐことができるといわれています(松岡・伊藤 2002)。ウマズラハギなどは生け簀の網に付いた付着生物をよく食べますが、刺胞をものともせず、オヨギイソギンチャクもよく食べるそうです。どれくらいの数を入れたらよいかは、生け簀の大きさなどによって変わります。愛媛県がおこなった研究によると大きさ5m角の生け簀でウマズラハギを 25～50 尾程度が適当という結果が出ています(松岡・伊藤 2002)。

本県では、県南のアマモに多数付着しているものを見かけたりする本種ですが、地元の人によると、昔はこんな生物がいたという話は聞いたことがないということでした。小割生け簀で魚を養殖されている漁業者の方も、「こんな生き物見たことがない」と思われているかもしれませんが、近年徳島県沿岸の水温が上昇傾向にあるといわれており(石田・上田 2008, 鎌田ら 2009)、本県でもオヨギイソギンチャクが大量発生する環境ができあがってきたかもしれません。高水温期の網替えや揚網時には、網の付着生物にもご注意ください。

文 献

岡田要ほか(1965)新日本動物図鑑(上). 北隆館刊, 262p.

内田紘臣・楚山勇(2001)イソギンチャクガイドブック. TBSブリタニカ刊, 22p.

松岡学・伊藤冬樹(2002)ヒラメ養殖安定化技術開発研究. 平成 13 年度愛媛県中予水産試験場報告, 127-130.

石田鉄兵・上田幸男(2008)徳島県海域の透明度の長期変動について～透明度から海の変化をみる～. 黒潮の資源海洋研究, 9, 45-52.

鎌田信一郎・吉村晃一・上田幸男(2009)紀伊水道における透明度の長期変動Ⅱ 徳島・和歌山両県観測データを用いた統合解析. 黒潮の資源海洋研究, 10, 15-26.